

# 国語

時間  
60分

「注意」

- 1、放送で指示があるまで、この冊子さっしを開いてはいけません。
- 2、この冊子は24ページまであります。ページが足りなかったり、順序がおかしかったり、また印刷が不鮮明ふせんめいで読めない部分があったりした場合には、手をあげて監督かんとくの先生に申し出なさい。
- 3、問題についての質問は一切受け付けません。
- 4、下書きにはこの冊子の下書き欄さんらんや余白を使いなさい。
- 5、字数指定のある問題では、句読点やカッコなども字数に含みます。

聖光学院中学校

1

(このページは空白です。)

(このページは空白です。)

一、次の①～⑤の文の――線部のカタカナを、それぞれ漢字に直しなさい。

① 夜の上野駅のホームには、ケイテキが鳴り響いていた。

② 寂しげな自分の姿が、寝台特急のシャソウに映っている。

③ この海峽のエンガン付近は、カモメの繁殖地として知られている。

④ その女性は、ヒツウな表情を浮かべながら栈橋で船を待っていた。

⑤ 私はひとり、雪が降り積もるゲンカンの大地を旅する。

二、次の①～⑤の文の~~~~線部は、( ) 内の意味を表す言葉です。例にならって、 にあてはまる言葉をひらがなで答えなさい。ただし、 には「」内の文字数のひらがなが入ります。

| 例                                                                    |
|----------------------------------------------------------------------|
| 時間がないので話のさ <input type="text"/> だけでも聞かせてください。(中心となる部分) 「二」<br>↓〈答〉わり |

① 窮地きうちに陥おちった彼は、こ  な手段を用いて難を逃のがれた。(一時しのぎの) 「二」

② 彼は私のき  に触ふれる、熱のこもった演技をした。(心を打つ) 「三」

③ 文章の一部をか  する。(やむをえず省略する) 「三」

④ 集まった人を見回して、お  に立ち上がった。(ゆっくりと) 「三」

⑤ 部下が作成したお  な書類の件で注意する。(その場しのぎでいい加減な) 「三」

三、次の文章は、冬森灯の『すきだらけのビストロ うつくしき一皿』の一節である。「山吹くん」(「僕」)と「織絵さん」は二人で美術館を訪れたが、目当ての絵を見ることができなかった織絵さんは落ち込んでしまった。そのため、「僕」は指輪を渡してプロポーズをするタイミングをつかめずにいた。二人は、美術館からの帰り道に織絵さんが見つけた風変わりなレストランに入ることにした。問題文は、そのあとの場面である。これを読んで、あとの問いに答えなさい。

変わった店だという印象は、サーカステントの中をのぞき込むと、いつそう強くなった。

ここは本当に野外のテントなんだろうか、プチホテルの一室とか映画のセットではなく？

イルミネーションの光る入口から一歩足を踏み入れると、ふかふかした絨毯に驚いた。靴のまま踏むのが申し訳ないような毛足の長い濃紺の絨毯には、花かご模様が織られている。室内に並ぶ棚や椅子は見るからにアンティークだ。よく手入れされ、どれもはちみつをかけたようにつやつやしている。テントを支える中央のポールにはシャンデリアがきらめき、ところどころに置かれたスタンドライトや大小のランタンが、室内をあたたかく照らしている。円筒形のストープには青い炎がゆらめき、その横にある深い緑色のヴェルヴェットのソファで、織絵さんはすっかりくつろいでいた。

とりわけ目を惹くのは、一枚の絵画だ。

クラシカルな猫脚の棚の上で、ぱつと目を惹く赤が、どんな照明よりも、部屋を明るくしていた。織絵さんはうつとりと絵を見つめていた。

描かれているのは、赤い室内に佇むふたりの音楽家らしき女性たちだ。ひとりとは小型のギターを、もうひとりとは楽譜を手になっている。傍らのテーブルには花や果物、菓子が置かれ、赤い背景には葉や花のような線と、アーチ模様が装飾的に描かれている。

コートを掛け、①少し迷いながら、小箱を鞆の中へ滑らせた。

ほどなく、ギャルソンがやってきて、僕たちは白いクロスに覆われた楕円形のテーブルに着いた。

「旬のフルーツシャンパンです。洋梨の風味をお楽しみください」

織絵さんが頼んでくれていたらしい。金色のシャンパンの中、三日月のような洋梨が、ほの白い肌に泡をまとってきらめいている。グラスに鼻を近づけた織絵さんが、いい香り、と呟いた。

続いて並べられた皿には、どれから手をつけようか迷うほど、前菜が盛り付けられていた。

「左から、ゴボウのポタージュ、秋ナスのベニエ、芽キャベツとブロッコリーのソテー、ハウレンソウとくるみのキッシュ、サーモンのテリーヌです。ごゆっくりお召しあがりください」

ほどよく色付いたバゲットがふたりの間に置かれるのをじりじりと待ち、僕たちは乾杯した。

洋梨とシャンパンを一緒に口に含むと、洋梨特有の魅惑的な香りがシャンパンの華やかさと重なり合って、極上の香水のように薫った。

デミタスカップに入ったポタージュには、カリカリに揚げたゴボウの薄切りが添えられ、まろやかなゴボウの滋味があふれた。ニンニクと唐辛子が利いた芽キャベツとブロッコリーは、歯応えもよく食欲をそそる。薄い衣のついた揚げナスは、表面はさっくり、中はとろりとして、スパイスの利いた塩で食べると異国の味がした。あたたかなキッシュからはほのかにチーズの香りが立ちのぼり、ホウレンソウの甘みとくるみの歯ざわりが、絶妙なバランスで口を満たした。イクラを添えたサーモンのテリーヌもいい。淡いオレンジ色のテリーヌは口の中でふわふわとほどけ、ぷちつと弾けるイクラの食感も楽しい。

「おいしいね」

「うん、おいしい」

その言葉以外思い付かず、僕と織絵さんは、ひとことだけで会話した。この一皿で十分に満足しそうなほど魅入られて、言葉を忘れた僕たちは、料理を夢中で口に運んだ。

「おいしい食べ物飲み物に、すてきな作品。最高だね」

織絵さんは、さっきの落ち込みぶりが想像できないほど上機嫌になり、食事の間も、棚上の絵をたびたび観ていた。あの絵がよほど気に入ったらしい。

「山吹くんはどう？」

絵のことだと気づくまで、時間がかかった。

「いい絵だね」

「それだけ？ さっきはあんなにいろいろ話してたのに」

織絵さんは口を尖らせるようにして、先を促してくる。仕方なく視線を絵に移したが、話せることなんて思い浮かばない。この絵について調べようがないからだ。美術館と違って、作品名も画家もわからない。よく見ればどこかにサインがあるのかもしれないが、ここからは見えなかった。織絵さんにそんなつもりはないのだろうか、②試されているようで、手のひらにじつとりと汗がにじむ。

黙りこくる僕を、織絵さんがいぶかしげに見た。

もしかすると彼女は、気づいているのだろうか。僕が虚勢を張っていることを。もし気づいているのだとしたら、さっさと謝ってしまった方がよいだろうか。A取り繕う余地はあるだろうか。

言うべきか。言わざるべきか。

こめかみのあたりから、汗がつうと流れ落ちる。

「もしかして、山吹くんで、美術を」

「ごめん！ わからないんだ」

間髪を容れず僕は頭を下げた。

今日は記念日なんかじゃなく、忘れてくても忘れられない、悲しい日になるのかもしれない。

「わからないんだ、絵のことなんて。美術館で話したのは、あの場で必死に調べたこと。ごめん。本当はなにもわからないんだ」

③ 織絵さんは、瞳をゆらして、視線を落とした。

\*

④ おや、なにかお口に合いませんでしたか？

テントの入口から、ギャルソンがするりと入ってきた。すっかり空になった皿を片付けてテーブルを整えると、小さく咳払いする。

「お待ちせいたしました。本日の<sup>\*2</sup> スペシャルテ、マエストロのプレジールは、巨匠<sup>きょうしやう</sup>のよろこびに思いを馳<sup>は</sup>せた一皿。お料理は、仔牛<sup>こうし</sup>のポワレ、パレット仕立てでございます。やわらかな仔牛肉を、色彩<sup>しきさい</sup>ゆたかなソースでお楽しみください」

目にも鮮<sup>あざ</sup>やかな一皿だ。

皿の中央に並んだ数切れが、仔牛のポワレらしい。断面はきれいな薔薇色<sup>ばらいろ</sup>で、上部にはパン粉のようなものがまぶされている。その周囲を、絵の具を筆でぼつてり置いたような、⑤ 色とりどりのソースが囲んでいた。赤や黄緑、黄色、白、紫に濃茶<sup>こいぢや</sup>。余白にはクレソンや青い小花<sup>いばな</sup>が彩りを添えている。小さなローストビーフの塊<sup>かたまり</sup>を思わせる仔牛肉は、ナイフがすんなり通った。最初のひとくちは、ソースをつけず、そのまま食べてみる。ほどよい弾力<sup>だんりよく</sup>があつて、とてもやわらかい。噛むたびにあふれてくる肉汁<sup>にくじゅう</sup>には癖<sup>くせ</sup>がなくて、パン粉のさくさくと軽<sup>かろ</sup>やかな歯ざわりになじみ、いつまでも味わっていただく。

ソースをまとわせて食べると、味の印象がそれぞれに変わった。

トマトの赤いソースは爽<sup>さわ</sup>やかな酸味が肉の味わいを深めてくれ、黄緑のソースに混ざる砕いたピスタ

チオの風味はあっさりした肉にほどよいコクを加えてくれた。バターの香る黄色いソースや、ワインとチーズの香る白いソースは重厚感で、紫と濃茶のソースはベリーとバルサミコの個性的な甘みと酸味で、肉のうまみをぐっと前面に引き出してくれる。

ギャルソンおすすめの赤ワイン、サン・テミリオンは重すぎず、果実感ある味わいが肉とソースの味わいをさらに深めて、体の奥底から深い満足感がしみじみと湧いてくる。

「おいしいね」

織絵さんが小さく呟いた。

「うん、おいしい」

もしかしたらこれは僕たちが一緒に食べる、最後の食事になるかもしれない。そんな悲しい食事だとしても、料理は、沁みわたるように、おいしかった。

B 奇をてらうわけでもなく、無理に味をつけるのでもなく、素材の味を自然に引き出して、よりおいしくしている、そんな真つ当な料理に思えた。

「私も、わからないな」

織絵さんがぼつりと呟く。言葉の意味を確かめようとした時、入口から C おずおずと声がした。

「お楽しみいただきましたか？」

大きな身をよじって、コックコートに身を包んだシェフが、テントに入ってきた。

ももごとと挨拶を述べていた彼は、僕らの皿がほとんど空になっているのを見ると、にんまりと頬を盛りあげて、饒舌になった。

「ここに飾った作品から想像を広げておつくりしました。〈色彩の魔術師〉と呼ばれた彼にちなんで、たくさんの色を召しあがっていただこうと思ひましてね。画家がよろこびを描き出す源、パレットのよきに仕立てました。彼の作品を見ると私はどうにも動き出したくなって、ソースが予定より多くなってしまうんですが」

その〈色彩の魔術師〉というフレーズには聞き覚えがあった。美術館へ向かう電車の中で、織絵さんから聞いたような気がする。誰のことだったろうか。

「わかります、その感じ」

織絵さんが頷くと、シェフはうれしそうに赤い絵に近づき、織絵さんと僕を呼び寄せる。

「ほら、このテーブルに、果物とかお菓子が描かれているでしょう。茶色い長方形のはガトーショコラじゃないかと思うんですよ。それで仔牛肉にチョコレートのソースを添えようとしたんですが、店の

者に、肉よりデザートがいいと言われましてね」

シェフと織絵さんにならって、僕も絵と向き合った。ガトーショコラの横には、赤いハートが描かれている。ケーキかなにかだろうか。ふと赤く塗られた床の隅に、文字があるのに気づいた。Hからはじまる文字の後半は、マティスと読める。

その瞬間、〈色彩の魔術師〉とは、アンリ・マティスのことだとも、織絵さんがここへ来てからあんなに上機嫌だった理由も、<sup>⑥</sup>すべてがつながった。

織絵さんとシェフは、並んで絵を見つめながら、楽しそうに言葉を交わす。

「この黄緑色の皮をした果物はなんでしょうね。洋梨かな」

「でもお嬢さん、これ丸いでしょう。青りんごかもしれませんよ。それより、この背景に描かれた模様。これ見ると私、エピってパンが食べたくなるんです。麦の穂の形をしたパンでしてね、ベーコンを挟んで焼いたのなんて、たまらないですよ。黒胡椒たつぷりで、ワインと合わせるとなお」

絵と直接関係のない話をしているのに、織絵さんはひどく楽しそうに見える。

そこで僕は、自分がなにか重大な間違いを犯していたんじゃないか、と気づいた。知識や背景で取り繕うよりも、こんなふうにただ素直に絵と向き合えばよかったんじゃないか、と。

「シェフは、美術がお好きなんですね」

「もちろん。美術も、音楽も、芸術全般が好物です。心のごちそうですからね。私はね、心が満ち、お腹も満ちたら、それは世界で一番おいしい料理なんじゃないかって、思うんですよ」

「その一番ってただひとつじゃなくて、いっぱいありそうですね。うれしいことや楽しいことは、ひとつでも多い方がいいもの。たくさん一番を見つけられたら、それだけ世の中がすてきな場所に思えそう」

「世の中ってやつには、憂いが多いですがね。すばらしい芸術と、おいしい料理があれば、憂き世を乗り越えていける気がするんです。だから、店の名は、つくし、とつけました。わかりますか？」

織絵さんと僕はしばし考える。

もしかして、と口にした僕に、シェフの包み込むようなまなざしが注がれた。

「憂き世の中につくしがあると、憂き世は、う『つくし』き世に、なる？」

シェフは大きく頷きながら、大きなクリームパンのような手で、僕の手をぎゅつと握った。

「心もお腹も満ちる一皿を、お届けしたいと思ひましてね」

テントの外から、小さな咳払いが聞こえた。

「その一皿、ただちにお願いしたいものです。お客さまがお待ちですよ」

シェフは、ギャルソンと入れ替わるように外へ出ると、鼻歌を歌いながらキッチンカーへのんびり歩いていく。その背中が、大きく見えた。

「デザートをお持ちいたしました。和栗のモンブランに、柿のガトーショコラ。エスプレッソとお召しあがりください」

銀のポットから、あつあつのエスプレッソを注ぐギャルソンを、織絵さんがのぞき込んだ。

「あの作品、どうしてここにあるんでしょう？ 私たち、あの作品が観たくて美術館に行ったんです。でも展示替えでもうそこにはなかった。それが、どうしてここに？」

ギャルソンは、織絵さんと僕を順繰りに見て、にやりと笑った。

「それは驚きますね。もしこれが本物なのであれば」

「ああなるほど、複製画なんですね」

僕のひとことをギャルソンは肯定も否定もせず、ただ笑みを浮かべていた。たしかに、美術館に飾られるような作品が、街の片隅の店にあるはずはない。彼が立ち去ったあとも、織絵さんはまだ疑っているようで、絵にじっと目を凝らしていた。

「真贋を見分けるのはプロでも難しいっていうけど、この作品にはなにかを感じるんだけどな。本物にだけ宿る、特別な気配みたいなものを」

織絵さんの感じるそのなにかは、僕が美術館で感じたことと、似ているだろうか。あの濃密な、深いところがかがやいているような、あの感じと。

「この絵が、織絵さんが観たかった絵なんだね」

改めて、赤い背景に佇むふたりの女性の姿を見してみる。

「うん。私、山吹くんと⑦こんなふうになれたらいいなって思ってた。一緒に観たかったの」描かれたふたりは、友人か音楽仲間のように見える。少なくとも、愛や恋といった雰囲気ではなさそうだ。

僕は鞆の中の指輪を思った。残念ながら、出番はないらしい。

エスプレッソの苦みを全身で味わいながら、ガトーショコラをつつく。柿のねっとりした甘みと、洋酒の利いたほろ苦いチョコレートケーキが互いを引き立てて、大人びた味わいがした。

「私もいろいろわからないよ。おいしいソースがどうできるのかも、あの絵がなぜここにあるのかも。だけど、おいしいし、楽しい。わからないって、窓を閉めることじゃなくて、むしろ開くことなのかも。」

わかったときの楽しさやうれしさを、未来に預けるみたいなこと」

織絵さんはガトーシヨコラをあつという間に食べ終え、モンブランに取りかかる。その目が一瞬、大きく見開かれたように見えた。

「もしかすると、一生わからないのかもしれない。芸術には答えがないから。触れるたびに新しい発見に出逢う気がする。だから、飽きないのかも。ずっとわからないから、少しでもわかりたくて、ずっと面白く感じる」

織絵さんが語るのには、彼女自身のことのように思えた。

僕には彼女こそ、わからないから、少しでもわかりたくて、ずっと面白く感じられる。

「この絵も？」

「うん。同じ場所にいても、お互いに別な場所を見つめているところが好きなの。そういうひととなら、面白い毎日を過ごせそうな気がする。今日気づいたのは、正面を向いたこのひとが、ちょっと山吹くんに似てること」

「えっ」

「微笑んでるけど、なにか企んでそうな感じが、そっくり」

織絵さんがこの絵に見ていたのは、音楽家だとか女性同士という表面に描かれたことではなくて、もっと本質的な、ひとの在り方みたいなものらしい。僕はやっぱり、彼女のことをがわからないと思った。そして、たぶんずっと、面白いと感じるだろうと。

モンブランにフォークを刺し入れると、予想外のさつくりとした手応えがあった。栗のクリームと生クリームに埋もれて、さくさくのメレンゲが姿を現す。それは秘密の宝物のようだった。

僕は、鞆の中の小箱に手を伸ばす。織絵さんに似合うだろうと選んだアクアマリンは、幸せな結婚という意味を持つそうだ。

「テーブルの上に赤いハートが描かれてるね。信頼の証かもしれないよ」

織絵さんは、あのとろけるような笑顔で僕に向けた。

「知識や背景を知るのも楽しいけど、私、山吹くん自身の言葉の方が、ずっと好き。さっき言おうと思ったの。もしかして山吹くんて、美術をもっと楽しめるんじゃないって」

織絵さんは絵の中のハートを見て、目を細めた。

どんな反応や返事がくるのか、僕にはわからない。

だけど、それを未来に預けてみようと思う。

ほんの少しだけ、絵の奥に秘められたあのなにかが、わかったような気がした。

このあふれるような、言葉にできない想いの欠片を、画家たちは筆に込めて、描き込むのではないだろうか。渦巻くような、うねるような、かがやく思いを、永遠に留めるために。

僕の差し出す手のひらの上、リボンの結ばれた小箱に、織絵さんが目を見開いた。

⑧ きつといま、絵画が、生まれる。

——冬森灯『すきだらけのビストロ うつくしき一皿』による

(問題作成上の都合から一部原文の表記を改めた)

(注) \*1 ギャルソン……食事を運ぶ店員のこと。

\*2 スペシャリテ……ここでは、コース料理の中心となる一皿。

\*3 アンリ・マティス……フランスの画家。

問一

~~~~線部A「取り繕う」、B「奇をてらう」、C「おずおずと」について、これらの言葉を本文中と同じ意味で使っている文として最もふさわしいものを、次のア～オの中からそれぞれ一つずつ選び、記号で答えなさい。

A「取り繕う」

ア 来店したお客さんの体型に合うように、スーツのサイズを丁寧に取り繕う。

イ 晴れた日には、ひなたで毛並みを取り繕う猫の姿をよく見かける。

ウ 牛乳をこぼしたことを笑顔で取り繕う弟の姿が、かわいくて微笑ましい。

エ 失敗した時には、思い切って取り繕うような誠実な姿勢が大切だ。

オ エアコンを取り繕うためにやってきた電気屋さんに、冷たいお茶を出す。

B「奇をてらう」

ア 彼は自分の心の中にある奇をてらうために座禅の修行に励んでいる。

イ 九回裏の攻撃で逆転を狙うバッターに奇をてらう思いで声援を送った。

ウ 寝ている最中に地震で起こされた母は、奇をてらうような声で叫んでいた。

エ 些細なことでけんかしたまま、奇をてらうこともできずに親友は転校してしまった。

オ 単に注目を浴びたいという理由で、奇をてらう行動をとる人の気持ちが分からない。

C「おずおずと」

ア ひさしぶりの休みなので車をおずおずと飛ばしてドライブする。

イ 楽しみにしていた誕生日のケーキをおずおずと待っている。

ウ とつくに締め切りを過ぎた算数の宿題を、先生におずおずと提出した。

エ クリスマスプレゼントをもらった弟は、喜びのあまりおずおずと飛び跳ねた。

オ 大切な試合でミスをした悔しさでおずおずと泣く僕を、みんながなだめてくれた。

問二——線部①に「少し迷いながら、小箱を鞆の中へ滑らせた」とありますが、このときの「僕」の心情について説明した文として最もふさわしいものを、次のア～オの中から一つ選び、記号で答えなさい。

ア もしかしたら、このあと指輪を渡すことができるかもしれないと思っている。

イ このまま指輪を織絵さんの鞆の中に入れてしまっても良いのだろうかと思っている。

ウ 未練はあるものの、指輪のことはもう考えたくないと思っている。

エ 織絵さんに渡す大切な指輪なので、なくさないように気をつけようと思っている。

オ このレストランでは、指輪を渡す機会は訪れないだろうと思っている。

問三——線部②に「試されているようで、手のひらにじつとりと汗がにじむ」とありますが、このときの「僕」の心情について説明した文として最もふさわしいものを、次のア～オの中から一つ選び、記号で答えなさい。

ア 今までは織絵さんの趣味に一生懸命に合わせてきたが、食事の席でまで自分に趣味を押しつけてくる織絵さんの態度に我慢の限界が来て、怒りが湧き上がっている。

イ 美術館ではお金に余裕があるようなそぶりを通してきたが、上品なレストランの雰囲気圧倒され、見栄を張っていたことがばれてしまうのではないかと慌てている。

ウ 美術館では予習してきた内容を堂々と語って格好をつけていたが、美術の知識がないことが織絵さんに既に気づかれていたという予想外の展開に戸惑っている。

エ 美術に詳しいふりをして織絵さんにいいところを見せようとしてきたが、この絵について話せる情報は何もなく、このままでは幻滅させてしまうと焦っている。

オ 自分が織絵さんに見合う相手であることを示そうと頑張ってきたが、織絵さんの即興の質問が、自分の知識不足を責めていることを感じ取り、もうプロポーズはできないと諦めている。

問四 ——— 線部③に「織絵さんは、瞳<sup>ひとみ</sup>をゆらして、視線を落とした」とありますが、このときの織絵さんについて説明した文として最もふさわしいものを、次のア～オの中から一つ選び、記号で答えなさい。

ア 山吹くんへの信頼が揺らぐ事態に直面して衝撃を受け、言葉を失っている。

イ 山吹くんが美術のことを好きなふりをして自分をだましていたと気づき、怒りを覚えている。

ウ 山吹くんにはもっと自分の言葉で美術について語ってほしい、という思いを飲み込んでいる。

エ 山吹くんは自分に合わせて美術館に付き合ってくれていたのだと気づき、罪悪感を覚えている。

オ 山吹くんは美術の好みが自分と根本的に合わないのではないかと悲観している。

問五 ——— 線部④に「おや、なにかお口に合いませんでしたか?」とありますが、どうしてギャルソンはこのように声をかけたのだと考えられますか。二十字以内で説明しなさい。

【下書き欄】—— 必要ならば使いなさい。

[illegible]

問六

——線部⑤に「色とりどりのソースが囲んでいた」とありますが、このような料理を作っているシェフの思いはどのようなものですか。その説明として最もふさわしいものを、次のア～オの中から一つ選び、記号で答えなさい。

ア 意のままに絵を描き出すことで見る人を魅了したマティスのように、色とりどりのソースを用いた特別な料理を作ること、人々を日常から解放する魔術師でありたいという思い。

イ マティスの作品に触発されて作った、色とりどりのパレットに見立てた料理が、食べた人々の心と体を満たし、辛いこともある日常を喜びに満ちた日々に変えたいという思い。

ウ 多彩な色彩を駆使して人々を楽しませるマティスの絵画のように、さまざまな好みを持った人々の個性に合わせて自分らしく生きていくことの喜びを提供したいという思い。

エ マティスが様々な色を用いたのと同様に、自分が作る料理もパレットのように色鮮やかに配色することで、このレストランを人々に喜びを与える美術館の代わりになりたいという思い。

オ 画家が喜びを描き出す源であるパレットをモチーフにした料理が看板メニューのレストランなので、織絵さんのような絵がわかる人にこそ、この料理を堪能してほしいという思い。

問七 ――線部⑥に「すべてがつながった」とありますが、それはどういうことですか。その説明と

して最もふさわしいものを、次のア～オの中から一つ選び、記号で答えなさい。

ア 織絵さんが真剣に絵と向き合う人だと気づいたことで、絵がわからないと言った「僕」の発言になぜ落胆していたのかがはっきりしたということ。

イ この料理が織絵さんが見たかったマティスの作品を元にしてしていると気づいたことで、彼女のことが好きな「僕」の心の中でも、ようやく料理と絵画が芸術的喜びとして調和したということ。

ウ きちんと絵に向き合えば見えなかったものが見えてくると気づいたことで、織絵さんが「僕」の嘘にも気づかないふりをして楽しそうに振る舞ってくれていた理由がわかったということ。

エ 絵の中の料理について想像を膨らませる楽しさに気づいたことで、今までは美術がわからないと逃げてしまっていた「僕」も織絵さんの気持ちを理解できるようになったということ。

オ 棚の上の絵がマティスの作品だと気づいたことで、先ほど美術館で目当ての作品がなくて落ち込んでいた織絵さんの心の変化に、「僕」も納得できたということ。



四、次の文章を読んで、あとの問いに答えなさい。

① 欲求が人間を不自由にする。それはどういうことだろうか。別の例を使って考えてみよう。

たとえば「私」が空腹になって、ハンバーガーを食べたいと欲求したとする。このとき、実際にハンバーガーショップに行つて、ハンバーガーを買つて食べることができれば、「私」は自分の欲求を叶えることができる。

A、そもそも「私」は、空腹になること自体を自分で望んでいたわけではない。空腹を満たすためにハンバーガーショップに行くか否かは、自分で選択することができる。だが、そもそも自分が何かを食べたいと思うということを、自分で選択したわけではない。つまり食欲という欲求は、この意味で、「私」が自分で選んだものではなく、自分の意に反して強制されたものなのだ。だからこそ、食欲に従つて行為することは、自分で選んだわけではないものに支配されることを意味する。つまりそれは「他律的」に行為することである。

これと同じことが、友達の秘密を暴露したい、という欲求にも言える。私たちは飲み会の席でつい注目を集めたいと欲求する。しかしその欲求は、「私」が自分で選んだものではなく、「私」に対して強制的に課せられたものに過ぎない。だからこそ、この欲求に従つて友達の秘密を暴露するという行為は、自分の自由を放棄すること、他律的に行為することを意味するのである。そして、そうした他律性を乗り越えるためには、欲求とは異なる行動原理によつて、つまり義務に従つて行為することが必要である。そうであるとする、友達に本音を言えるためには、その友達がこうした欲求に抵抗することができる、という信頼が必要である。<sup>\*1</sup> カントは、このように欲求に屈することなく義務に従つて行為することを、「自律性」と呼ぶ。そして、自律性こそが人間の自由に他ならない。

B、② 私たちが従うべき義務とはいったいどのようなものなのだろうか。友達の秘密を暴露してはならない、ということは、一つの義務である。義務は、それが欲求を乗り越えさせるものである以上、欲求から導き出されるものであつてはならない。では、義務はどこにその根拠を持つのだろうか。ここからがカント哲学の難解な部分ではあるが、できるだけ簡略化して彼の論理を再構成してみる。

義務とは一つの規範である。規範には大きく分けて二つの種類がある。一つは、「私」に対して、あるいは特定の人々に対してだけ当てはまる規範であり、もう一つは、すべての人々に当てはまる規範である。前者は特定の人々を特別扱いする規範であり、後者はすべての人々に等しく当てはまる規範である、と言える。後者は、やや形式的な言い方をするなら、普遍的な妥当性をもった規範である、と表

現することもできる。

**C**、「私以外の人は嘘をついてはいけない」という規範について考えてみよう。この規範は、自分を特別扱いする規範だろうか、それともすべての人々に等しく当てはまる規範だろうか。明らかに前者である。もしも「私」がこの規範に従って行為するなら、「私」以外のすべての人は正直なのに、「私」だけは嘘をつくことができるのだから、きっと「私」は多くの利益を享受することができよう。では、この規範は「私」を自由にしているとと言えるだろうか。

「私」が自分の利益を追い求める、ということは、「私」が自分の欲求に支配されていることを意味する。欲求は人間を不自由にする。そうである以上、この規範が「私」を自由にしているとは言えない。自分だけを例外扱いする規範を望むとき、「私」は依然として自分の欲求の奴隷になっているのであり、他律的に生きていることになるからである。

**D**、自律的な人間が従うべき義務とは、すべての人々に等しく当てはまる規範でなければならぬ。たとえば、先ほどの嘘の例でいうなら、自律的な人間が従うべき規範は、「嘘をついてはいけない」と定式化されなければならない。自分だけを例外扱いしてはいけないのだ。

整理しよう。人間には本音が言える友達が必要である。<sup>③</sup>友達に本音を言えるためには、友達が自律的であることを信頼できなければならない。人間が自律的であるためには普遍的な義務に従うことができなければならない。したがって、そうした義務に従って行為できる人間同士が、真の友情を交わすことができる、ということになる。「友達の秘密を暴露してはいけない」という規範もまた、こうした道徳的な義務の一つなのである。

カントは、このように相手に対して本音を言うことができる関係を、「道徳的友情」と呼ぶ。それは、互いに欲求に対して抵抗することができ、普遍的な義務に従って行為することのできる者同士の、友情である。

<sup>\*2</sup> 前章で紹介した<sup>\*3</sup> アリストテレスは、友情を愛によって結びつくものとして捉えていた。しかし、私たちが何を愛するかは、私たちには決められない。したがって愛だけでは友情を完全に自律的にすることはできない。それに対してカントは、友情を成り立たせる感情として、愛とともに「尊敬」を挙げている。道徳的友情とは、愛と尊敬によって形成される関係性なのだ。

もしかしたら、愛と尊敬はよく似た概念であるように思われるかも知れない。しかし、カントにとって両者はまったく異なる概念である。

愛とは、他者の目的を、「私」の目的とする感情のことである。要するに、相手のことを自分のことのように思う、ということだ。他者が喜ぶことを「私」も喜び、他者が悲しむことを「私」も悲しむ。そのように他者に共感する、あるいは同情することが愛に他ならない。他者を愛するということは、他者が「私」から区別された、「私」と無関係な人物であると見なすことではなく、他者を「私」とある意味で同一視することなのである。

カントは、こうした意味での愛を「引力」に喩<sup>たと</sup>えている。すなわちそれは「私」と他者の間にある隔<sup>へだ</sup>たりを解消しようとする働きであり、互いに近づき、できることならば一つになろうとすることなのである。

これに対して尊敬は、<sup>④</sup>他者を「私」の目的のための手段として利用することはできない、という感情のことである。カントは、どのような人間も単なる手段として扱われてはならない、と考えた。それが人間の尊厳である。そうした尊厳を尊重することは、他者を自分の道具や駒<sup>こま</sup>にすることを、自分に禁じることに他ならない。

なぜ、人間には尊厳があるのだろうか。カントによれば、それは、人間が自律的な存在だからである。人間以外の動物は、衝動的な欲求に従って生きているだけであり、不自由である。それに対して人間は、道徳的な義務に従うことができ、その点で自律的であり、自由である。この自由こそが人間の尊厳の根柢なのだ。

したがって、他者を尊敬するということは、他者の自律性を尊重することに等しい。そしてそれは、他者が自分の思い通りにならないということ、他者には「私」が侵<sup>か</sup>すことのできない自由があるということ、を、認めることである。それは、ある意味では、他者を「私」から隔たつたものとして受け入れることでもあり、「私」と他者の間に距離<sup>きょり</sup>を維持<sup>いじ</sup>することを意味する。このような観点から、カントは、尊敬を「斥力<sup>せきりょく</sup>」に喩<sup>たと</sup>えている。斥力とは、二つの物体が遠ざけ合う力に他ならない。

前述の通り、友達の秘密を暴露しない、という規範は、友情に課せられる一つの義務である。このような義務に従って行<sup>な</sup>うことができる人間を、私たちは尊敬する。飲み会の席であつても、決して友達の秘密を語らない人は、それだけで尊敬に値<sup>あた</sup>するのだ。そして、そのように尊敬するからこそ、「私」はその人間を道具のように扱ってはならないと感じる。そうした尊敬がなければ友情は成立しないのである。

カントによれば道徳的友情は、こうした、引力としての愛と斥力としての尊敬が均衡<sup>きんこう</sup>することによって、成立する。彼は言う。「友情（その完全性においてみられた）とは、<sup>⑤</sup>二つの人格が相互<sup>そうじ</sup>に等しい愛と尊敬とによって結合することである」。これこそカントの考える理想的な友情に他ならない。

カントはアリストテレスの友情論をどのように訂正したのだろうか。それは、友情が愛だけでは成り立たない、としたことだろう。なぜなら愛は自由ではないからである。私たちは、ただ相手を愛しているだけでは、依然として欲求に従っているし、他律的かも知れない。そして、そのように自分の感情に無抵抗でいるなら、状況が変われば、友達の秘密を暴露したいという欲求にも勝てなくなり、それによって友情を破綻させてしまうかも知れない。だからこそ、友情には欲求に抵抗する力、愛に抵抗する別の力が必要なのだ。それが、相手の自律性を尊重すること、すなわち友達への尊敬なのである。この意味において、カントは友情が自律的な関係であるという⑥伝統的な友情観を、根本的にアップ  
デートしたと言えよう。

——戸谷洋志『友情を哲学する 七人の哲学者たちの友情観』による

(問題作成上の都合から一部原文の表記を改めた)

(注) \*1 カント……ドイツの哲学者。

\*2 前章……本文より前の箇所を指す。

\*3 アリストテレス……古代ギリシャの哲学者。

問一

A D

にあてはまる言葉を、次のア～エの中からそれぞれ一つずつ選び、記号で答えなさい。ただし、同じ記号は二回以上使えないこととします。

ア したがって

イ しかし

ウ たとえば

エ では

問二

——線部①に「欲求が人間を不自由にする」とありますが、それはなぜですか。その説明として最もふさわしいものを、次のア～エの中から一つ選び、記号で答えなさい。

ア 人が自らの欲求に従ううちに、文化的な秩序が崩れて社会全体が窮屈なものになるから。

イ 自分が何を求めるのかも、実は第三者の意図によってあらかじめ決められているから。

ウ 自らの意志で選択した行為が、かえって自らの行動の可能性を狭めることになるから。

エ 自分の望みを満たしているつもりでも、その欲求を持つこと自体は自分で選択できないから。

オ 人のむき出しの欲望の中には倫理的でないものもあり、常に自省する必要に迫られるから。

問三——線部②に「私たちが従うべき義務」とありますが、その具体例として最もふさわしいものを、次のア～オの中から一つ選び、記号で答えなさい。

- ア どんなに早くから並んでいたとしても、会員でなければ入場してはならない。
- イ 入院している患者は、勝手におやつを食べてはならない。
- ウ 怖い先生が見ているところでは、礼儀正しくしなければならぬ。
- エ たとえ家族のためだとしても、嘘をついてはならない。
- オ 生徒は、先生用の通用口を使ってはならない。

問四——線部③に「友達に本音を言えるためには、友達が自律的であることを信頼できなければならぬ」とありますが、それはどうしてですか。その説明として最もふさわしいものを、次のア～オの中から一つ選び、記号で答えなさい。

- ア お互いに自律的な人間であることを認め合うことができないと、本当の友情と言えないから。
- イ 友達だとしても、自分の欲求から自由になつていない人は、自分の利益を優先してしまうから。
- ウ 友人の自律性を信頼するという普遍的な義務に従うことが、友情を育むために不可欠だから。
- エ 本音を言いたい気持ちをお互いに持つていることが確認できて、初めて相手を信用できるから。
- オ 感情のコントロールをすることができないような相手とは、友人関係を維持できないから。







